

巻頭言 学習支援図書館と言えますか？

創価大学附属図書館主事 山口 喜一郎

CETLと図書館は、学生のためにできることは可能な限り挑戦しようとの思いが共にあったことで自由闊達な意見交換が行われるようになり、その中から「書評の書き方講習会」が生まれた。この講習会は、学部生にとって魅力的な講座の一つとしてきっと定着するだろう。今後、CETLと図書館は、学習支援を強化するためにますます関係性が深まっていくと思うが、効果的な学習支援策を打ち出さなくては存立基盤そのものが危うくなってしまいうに違いない。

さて、「創価大学図書館は学習支援図書館と言えますか？」と誰かに問われたら、私は何と答えるだろう。躊躇せずに「その通りです」と回答するものの、「では、その中身は？」と重ねて問われたら、即座に回答できない可能性が高い。学習支援機能・サービス改善がこの10年間で200項目以上に及んでいるため、どのように話を組み立てたらよいか迷うからである。

その中身については、図書館ホームページの「サービス重視のあゆみ」を是非ご覧いただきたいが、一読すればわかるようにそれらは利用者にとっては当然そうあるべきもので、私たち図書館員は200の欠陥をリカバリーした結果に過ぎないと謙虚に考え、更に前進していきたいと考えている。

具体例を挙げてみよう。現在、皆さんが当た

り前のものとして、享受している学部生サービス・機能はそのほとんどが10年前には無かったものである。どのような有様だったか、いくつかを挙げてみる。①全ての申請は所定用紙による提出、②貸出冊数は5冊、③入庫不可、④文庫・新書は数種類、⑤新着図書の新着は月1回程度。以上のような状況だったため、学習支援という点では不十分極まりなく、改善されてしかるべきものであった。

創価大学図書館が改革を進めるに従って、学部生のための学習支援機能はより鮮明になってきた。それは、①読書支援図書館、②学習支援図書館、③魅力的な本の図書館、④サービス重視図書館、⑤電子図書館、⑥建学の精神あふれる図書館、の6つの目指すべき図書館像である。

今後、創価大学図書館が取り組むべき学習支援機能・サービスのポイントは、①学部生にとって必要な図書や雑誌については執念を持って収集する、②必要な資料は必ず入手できるような仕組みづくりをする＝様々なオンライン申請やWEB連携を更に高度化すると共に、「いつでも」「どこからでも」アクセスできる環境を整えたい、③読書支援としてだけではなく、学習支援のためのSoka Book waveとする＝今年から始めた「Doku☆Stuラリー」やレビュー提出を効果あるものに育てていきたい。以上の3点であ

る。

繁盛している商店主が「お客様の喜ぶ顔があったから」とサービス向上の動機を話すTVの特集番組をよく見かけるが、最近、私はその心境がわかるようになった。学生が喜ぶ姿こそが、私たちが図書館を改革するためのエネルギーであり、昨年度初めて年間入館者数が50万人を突破、貸出冊数も15万冊を越え、共に10年前の数値の倍以上となったのは、学生の声に耳を傾けて推進した改善・改革に負うところが大きいと判断している。多くの利用者が来館し、

騒がしいのは困るものの、笑顔に満ち溢れた空間となってきたのが何より嬉しい。

ふと『それを作れば、彼が来る』とのフィールド・オブ・ドリームスの印象的なメッセージと鮮やかな緑のとうもろこし畑のシーンを思い出した。図書館もそうありたいと願っている。



全学読書運動2009のウェブページ
<http://www.soka.ac.jp/Library/general/sbw/>

実施報告：「書評の書き方講習会」

CETL助教 安野 舞子

昨年度に初めて行ったCETLと図書館共催による「書評の書き方講習会」を、本年も5月から6月にかけて実施しました。合計3回の講習会、若手教員2名による講義およびグループ・ワーク形式、指定図書（姜尚中著『悩む力』）についての書評書きという基本スタンスは踏襲しつつ、更に「10本の短い書評を読み、その中から自分が薦める作品を1本選び、その理由を発表する」というワークも設けました。内容の濃い講習会であっただけに、受講生からの反応は、次のアンケート結果に見られるように非常に良いものでした。「この経験があれば、次に何か文章を書

くという出来事に会ったときに心強いと思います。（女子1年）、「今まで受けてきた講義の中でも1位2位を争うほど、ためになり刺激的な講習でした！（男子2年）」、「私」というフィルターを通して本を紹介する、この考えが新鮮だった。人間としての人格が書評に出るなら、もっと自分を深めて広がっていかないとあと思いました。（男子3年）」。

大学生の読書量、文章力の低下が叫ばれて久しい昨今ではありますが、こうした課外学習支援の取り組みが益々大切になってくる——こう実感する講習会となりました。

書評講習会を担当して

文学部助教 吉野 良子

わずか3回。限られた時間を最大限に活用すべく、ノウハウの伝授よりむしろ個々の自由な発想や考える力、多角的視野を養う機会となる

よう努めた。紙幅の関係上詳細は割愛するが、受講生の満足度の高さからも概ねこの試みは成功したのではないかと喜んでいる。

成功の要因は受講生の積極的な参加に支えられた本講習会特有の運営スタイルに負うところが大きい。

専門の異なる同僚（安野先生のご専門は教育学、筆者はEU研究）と目的・到達点・運営方法等々を自由に議論しアイデアを出し合い1つの講座を創り上げる。リレー講座ではなく2名の

教員で毎回運営する。受講生と教員との双方向コミュニケーションを重視する。智恵を出し合った結果は、1+1が3にも4にもなったと言えは言い過ぎだろうか。

FDの目的を対等な教員相互の交流による教員力の向上とすれば、私にとって本講習会担当は有意義で楽しいFD活動でもあったと思う。

ICTサロン(CETL勉強会)を開催

6月10日（水）午後4時半から6時半にかけて、文系A棟8階会議室にて、平成21年度「ICTサロン（CETL勉強会）」を開催しました。サロンでは、千歳科学技術大学 グローバルシステムデザイン学科の小松川浩教授をお招きし、千歳科学技術大学の特色あるe-learningの取り組みをご紹介いただきました。山中キャリアセンター長をはじめ、各学部のCollabTest利用教員、e-learningを専攻している工学部大学院生ら18名が参加し、活発な質疑が行われました。



千歳科学技術大学 小松川浩 教授

理工系単科大学である千歳科学技術大学は、高校生および大学生が連携し、魅力あるコンテンツ作成や独自開発システムCIST-Solomonを生かしたe-learningの取り組みを進めています。その活動を学生の学力向上のみならず、FD（Faculty Development）活動等にまで幅を広げ

ており、千歳科学技術大学はICT活用教育の先駆的な存在として知られています。

小松川教授には、入学前の在宅学習支援の事例や、大学院FD委員会・（学部）FD委員会の連携による知識整備の実例などを踏まえ、e-learningの活用方法を余すことなくお話ししていただきました。

また、本学教員より、魅力あるコンテンツを学生が作成するための工夫や、学内にe-learningシステムを浸透させるための体制などについて質問がなされ、小松川教授より本学がe-learningを推進していくための様々なアドバイスをいただきました。

CETL・ICT活用教育推進部では、今回学ばせていただいたICT活用教育を、本学のFD活動として教育支援へとつなげて参ります。



会場の模様

本年度第1、第2回FDセミナーを開催

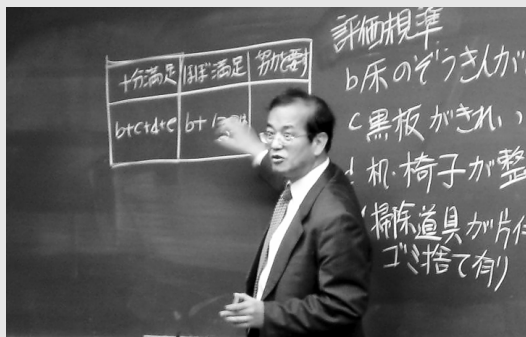
CETLでは本年度からFDセミナーの回数を増やし（今年は年6回）、先生方の多様なニーズに応える多彩な研修企画を準備しています。回数を増やすことで、少しでも多くの先生方に参加していただきたいと考えています。また同時に、万人向けの入門講座だけでなく、内容を絞り、

特定の知識や技能に焦点化したアドバンスレベルの講座も提供していきたいと考えました。講師選びやトピック選定など、試行錯誤を重ねながらの取組ですが、CETLの教育支援の新しい形として発展させていきたいと思ひます。

第1回FDセミナー

本年度第1回目FDセミナーは、5月15日（金）午後4時50分から6時30分まで、文系棟A424教室で開催されました。

セミナーの講師に、奈良教育大学教職大学院の安藤輝次教授をお招きし、評価基準表（ルーブリック）を使った指導法や、レポートおよびプレゼンテーションを評価する際の工夫について、ご講義いただきました。



奈良教育大学教職大学院 安藤輝次 教授

評価ルーブリックというパフォーマンス評価やポートフォリオ評価には欠かせない道具について、具体的な例を挙げながら分かりやすい解説がなされました。かなり焦点化されたトピックにもかかわらず、セミナーには20名の先生方が参加され、熱心に質疑を交わされていました。

参加者の声

- ・大変参考になりました。特にレポート評価にルーブリックは有効な方法だと思いました。是非実践してみたいと思ひます。
- ・成績評価について理解を深めることができた。
- ・評価基準を学生に公開して、レポートを書かせフィードバックするという方法が参考になりました。
- ・見えないものを見えるようにする方法が参考になった。
- ・参加型のセミナーであったことが良かった。



会場の模様

第2回FDセミナー

本年度第2回目のFDセミナーは、6月12日（金）午後4時50分から6時半にかけて、文系棟A424教室において開催されました。

セミナーでは、「講義科目における授業工夫」と題し、本学教育学部長の坂本辰朗教授および、文学部長の山崎純一教授のお二方に、ご自身の授業方法について解説いただきました。



坂本辰朗 教授

坂本先生は1年次必修の「初等教育原理」における取組を報告されました。そのポイントはいくつもありますが、①事前に課題文献を読みあう予習会をグループごとに持たせ、そこにSAをつけてリードさせる、②授業では教育の今日的課題を意識させつつ、教育学の基本を講義する、③講義の前後にはグループ発表やアクティビティ（参加型の学習課題）を配し、学生の学習意欲を喚起させる、これら3点は特に印象的です。こうした様々な工夫の上に、授業アンケートで報告される授業外学習時間48ポイントという驚異的な数値があることが分かりました。

山崎先生も同じく1年生対象の「現代の社会」における工夫について報告されました。



山崎純一 教授

山崎先生の授業の特徴は、予習範囲に関する毎回の小テストと、現代的課題と社会学の基礎理論との結びつきを考えさせるユーモアあふれる丁寧な解説でした。講義中心の授業ながら、授業アンケートによる授業外学習時間2.7ポイントは大学平均を大きく上回っています。



会場の模様

セミナーには、本学の教員31名にご参加いただきました。多くの参加者の方より、両学部長の授業における工夫に強い感銘を受け、自身の授業に生かしていきたいとの声が寄せられました。代表して、WLCセンター長の田中亮平先生に感想を寄せていただきました。

「講義形式の授業をどう活性化するか」、12日のセミナーでは、自分にとって新しい角度からいくつかのヒントを頂いた思いであった。

二点だけあげれば、両学部長とも次週の予習用に課題論文を配布し、それを「読んできたことを前提に」、講義ではさらに発展的な内容を扱

っておられたこと。もう一つは概論であっても、学説史の紹介というアプローチは取らず、実際の現象を分析する作業の側面からアプローチするスタイルをとっておられたことである。

自らの講義を省みて反省しつつ、大いに刺激を頂いた。

本年度第1回教育サロンを開催

6月5日（金）午後4時40分から18時10分にかけて、文系A棟6階会議室において、本年度第1回目の「教育サロン」を開催しました。教育サロンは、教職員のインフォーマルな情報・意見交換の場として、年に数度開催しています。今回のサロンには、本学の教職員17名に加え、ちょうどCETL視察に来学された名城大学・大学教育開発センターの難波様と神保様が参加しました。



参加者での記念撮影
(前列左から4人目が名城大学の難波様、3人目が神保様)

今回は、高等教育改革の動向を知る上で、昨年末に発表された文部科学省中央教育審議会（中教審）の答申「学士課程教育の構築に向けて」の内容を理解することは有益であると考え、テ

ーマを「高等教育改革の動向を考える①－中教審答申を読む－」としました。

サロンでは、まず西浦副センター長より同答申の概要が紹介され、その後、参加者の間で、その示唆する内容や今後の課題について、活発な議論が展開されました。



会場の模様

名城大学の難波様から、CETL訪問の印象と合わせて、教育サロン参加の感想を寄せていただきました。



創価大学 教育・学習活動支援センター訪問調査・教育サロンに参加して

名城大学大学教育開発センター課長 難波 輝吉

今回、創価大学様の先駆的なFDの取り組みと協同学習法をはじめとする「学生の主体的な学び」を応援する実践的取り組みを学ぶということをテーマに、訪問調査をさせていただきました。

今回の訪問調査では、FDをはじめとするCETLの諸活動から、学生が本気で学んでくれる教育内容と指導法とその学習環境づくりを視野におさめ、先生方が本気で学生と向かい合っていく重要性を再認識することができました。帰学後に開催したFD委員会においては、平成21～22年度までのFD活動の基本指針を「学生の主体的な学びを促すための教育活動の探求・実践および蓄積を目指したFD環境の構築」と決めました。「主体的な学び」という言葉は、学部の特長や専門性に関係なく、教育を実践していくうえでの共通言語だということが再確認できました。まだ、抽象的な理解のレベルかもしれませんが、この言葉こそ「名城育ちの達人を社会に送り出す」というキーワードであると信じ、今後の名城大学の教育力向上、質保証の実現をミ

ッションとして、組織的な教育改善に取り組んでいきます。

また、大学間での知の共有とネットワークづくりの第一歩を踏み出したと強く感じております。大学にはそれぞれ固有の文化や歴史がありますが、教育研究を通じて将来の我が国を担う人材を育成する取り組みは、共通する本質的な営みです。現実目向けることは大切ですが、大学の壁を越えて、夢や思いを語ることができる場こそ、新たな気付きを生み、そして、よりよい教育の実践に向かう貴重な第一歩だと思います。一つの大学ではなしえないことであっても、ネットワークを活かせば解決できることも数多くあると思います。今回の交流を契機に、協同体制で取り組める課題にも挑戦していければと思っています。(多分に創価大学様の知恵を借りることになるかもしれませんが…)

最後になりますが、今回の訪問調査に際し、快く受け入れていただきました教育・学習活動支援センター長の関田一彦先生をはじめ、創価大学のみなさまに厚く御礼申し上げます。

CETL学習セミナーの試み

今までCETLの学習支援企画は1年生を対象とするものが大半でした。けれど近年、基礎ゼミをはじめ、各学部や共通科目運営センターが初年次教育に力を入れています。そこで、初年次教育後の学習支援ニーズを探るため、2年生を対象とした学習法セミナー(タイムマネジメント講習会・学習スキルアップ講習会)を本年4月10日と15日に行いました。どちらも定員をオ

ーバーし、追加開催分も含め、延べ96名の2年生が参加してくれました。

質疑や作業の様子から、基礎ゼミで扱う内容の定着が不十分な学生が少なからず見られ、継続的な学習スキル訓練の必要性が示唆されました。CETLとしては、後期にも同様の趣旨で学習セミナーを持ち、新たな学習支援プログラムの開発を始めます。

WLCとの共催でFD講演会を開催

6月26日（金）16時35分から18時5分まで、本部棟M205教室にて、WLCとCETLとの共催のFD講演会を開催しました。講師に、オーストラリア・ニューイングランド大学教育指導・高等教育運営学科のブライアン・デンマン教授（Dr. Brian Denman）をお招きし、「逆説と模倣：高等教育におけるグローバル化とインターナショナル化」（Paradox or Parody: Globalisation and Internationalisation in Higher Education）と題して、ご講演いただきました。

講演会には、本学の教職員および学生26名にご参加いただきました。



会場の模様

Information

第4回FDセミナーのご案内

本学が参加する大学連携プロジェクトが、平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択されました（申請代表校：帝塚山大学、課題名：『北海道・関東・東海・近畿の大学連携による「知域」拡大プロジェクト』）。これにより本学は、2011年度までの3年間、帝塚山大学、札幌大学、明治薬科大学、愛知学院大学、名古屋学院大学と連携協力して、TIESと呼ばれるe-ラーニングシステムの活用・開発を進めることとなります。

そこで、TIESシステムの活用法について、教材作成やシステムの体験的理解を目指したセミナーを右のように開催いたします。すでに20名を超える先生方から参加申し込みをいただいておりますが、まだ席に多少の余裕がございます。関心のある先生方は、お早めに教務第一課の葦沢まで電子メール（nirasawa@soka.ac.jp）にてご連絡ください。

第4回セミナー

【日 時】 9月26日（土）10:00-16:00

【会 場】 A424（予定）

【テーマ】 教材作成とe-ラーニングの活用

【講 師】 外部講師を予定

編集後記

セミナーやサロンでお話し下さる講師や参加者の皆様の情熱あふれるご様子を拝見すると、元気になります。アンケートでお寄せいただいた思いのこもったご感想を拝見すると、心が洗われます。次回が楽しみです。（T）

C E T L Quarterly No. 36

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター
〒192-8577 八王子市丹木町1-236
Tel: 042 (691) 9782 内線 2146
E-mail: cetl@soka.ac.jp
http://cetl.soka.ac.jp